

< 倉敷青陵高校 >

高校教研集会で

京都では毎年、京都教研、高校教研、市教組教研などの教育研究集会在秋に開かれている。私は「京都の大学に来てたしかに京都の高校出身の学生はどこか違う」と肌で感じていたこともあり、「京都の高校3原則（総合制・小学区制・共学）と岡山の教育とどこが違うのか？」と、市議員になってからもできるだけ教研集会などにも参加して考えてきた。

府立洛東高校で開かれた高校教研集会に参加したときのこと、講演は中央大学の村越邦男先生（「なんだ坂こんな坂 子どもの発達と家庭生活」など教育問題での著作多数）であったが、「私の教えている学生にアンケートに書いてもらったら＜暗い高校生活だった＞＜大学を目指すことだけが目的で入学したけれども何をすればいいのか＞といった声が多かった」といってそのアンケートを会場参加者に回覧した。

何枚目かに目を通した私は読みながら「えっ！これは」と感じるものがあつた。もちろん氏名などは消されていたがその文章には「私の卒業した高校は岡山で自由な校風が残っており、体育祭は1～3年の縦割りクラス対抗で普通科と家政科のクラスが組んで競技をした。楽しい思い出がいっぱい」といったことが書かれてあつた。＜これは倉敷青陵じゃないか！＞私は直感した。

県立倉敷青陵高校

岡山県下では当時（現在は知らないが）公立高校普通科はいくつかの学区に分かれていて学区外からの入学は「5%枠」という制度があつた。定員400人の内20人だけは学区外からの入学が許される。岡山市内の進学校であつた岡山朝日、操山などの5%枠には全県下から志望者が集中した。私は「とにかく中学校時代の同僚のいる高校には行きたくない」の一念で遠い倉敷の高校を選んだ。幸い20人に定員にその年は11人しか志望が無くて無事入学できた。

通学は下津井電鉄（「マッチ箱のような電車」といわれた小型の電車、今は廃線になってしまった）で1時間、国鉄バス（当時）で30分というかなりの負担であつたが朝6時40分に家を出て3年間通学した。時には寝過ごして朝食抜きの日には電車内で弁当を食べ、昼食は購買部でパンを買って済ませた

ことなどもあつた。

1年の最初はとにかくクラスの全員が見知らぬ集団であり、戸惑つたこともあつたが、やがて次第に仲間もでき、そのうちにサッカー部と新聞部に入部、2年になると生徒会役員も引き受けるようになった。サッカー部の先輩や生徒会役員（特に女性が活発だつた）などと汗を流したことなく、とても楽しい思い出に残る高校生活だつた。

（2年生と3年生のとき停学処分を受けた件は「母のこと」の項で書いた）

学園祭での思い出は男子生徒有志による「寮歌」である。一高の「ああ玉杯に花うけて」三高の「紅もゆる丘の花」などは有名だが、我が倉敷青陵には3つの寮歌が（寮はなかつたので陵歌だが）あつた。謳歌爛漫、追懐の歌、ああ木枯し、それぞれいまでも節回しは口をついてでてくるほど当時歌っていたが、卒業に当たって「16期生記念の陵歌 備南洛陽健児幽幽」を作ってしまったのである。

今からふり返ってみれば教職員組合もあつたようだ。私が高校3年のとき、原水禁世界大会が京都で開かれたので長兄とともに参加することにして岡山代表団の集合場所に行ってみると我が校の先生たちも来ていて「なんだ君も行くのか」といわれた。

私が京都大学のことを知つたのはこの時の京都での大雨の行進と集会が終わって旅館（熊野神社近くの）に帰り、夕方散歩に出かけたときのことである。哲学の道から京大本部（多分工学部）構内を散歩するうちに「京都大学もいいなあ」と思い、「そうだ！京大に決めた」と志望大学をそれまでの東京工業大学から変更したことを記憶している。

今も楽しい交流が

倉敷青陵16期生の同窓会は今も4年に1回、オリンピックの年に開かれ毎回100人近くが集まっている。また私の2年生の時のクラスはとてもにぎやかで、時々クラス同窓会も持って、京都で秋に1泊し大原三千院、寂光院をたずねたこともある。

先生方もそれぞれ思い出があるが、O先生は立命館にこられ、I先生は京都女子大にこられてお会いすることもあつた。（両先生ともお亡くなりになつたが）



当時の下津井電鉄の電車